

聖霊を与える約束

ヨハネによる福音 14:23-29

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。

説教

いやあーほんとうにわからない。

2013.5.5、2014.5.25、2015.5.10 とセカンドチャーチでは過去に3回復活節第六主日を祝ってきて、説教もそのたびにしているのですが改めて以前の説教を読み返してみるとわかっていませんなあ。今年もわたしにとってちょっと困ってしまう復活節第六主日がやってきました。聖書本文もかなりややこしくて、どのようにも読める、解釈できる箇所です。ややこしいという意味では、煙(けむ)に巻く、逆に言えば煙に巻かれてしまうところでもあります。

初手からテキストは「わたし（イエス）を愛する人は、わたしの言葉を守る」と始まり「愛さない者はわたしの言葉を守らない」と続きます。そしてさらにあなたがたが聞いている言葉はわたしのものではない、父のものだといえます。「聞いている言葉」というちょっとひっかかる言い回しは、主語が（ギリシア語は述語の格変化で主語を省略できるので原文にはあなたがたとはありません）あなたがたになっているので受身（受動態）になるのですが、イエスが語った言葉というふつうの言い方（能動態）ではなくわざわざ、あなたがたが聞いている言葉といういい方をなんでしているのか、その意味をどう汲み取ればいいのでしょうか。

解説のさきに結論をいってしまえば「説明しなければわからないのであれば、説明されてもわからない」ということです。なんとも無責任な言い方で、説得力もなにもあったもんじゃありませんが、ヨハネの告別説教とよばれる聖書箇所は、読む人がそれぞれにほんとうにその気になって読まなければ、聖書の言い回しで言えば、読むのではなく、聞かなければわからない、というのがほんとうのところ。「わたしを愛する人はわたしの言葉を守る」とイエスは語ります。わたしを信じるとはいわずに愛するといえます。この愛はギリシア語ではアガペということばです、ここにポイントがあるのかなあと感じます。これが愛、アガペではなく信じるという言葉遣いならば、わろくとればイエスを盲信するということという意味にもとれますが、アガペ（愛）するという言葉を語るイエスはただ信じること以上を要求しているようにも思えます。ここでは信じるという意味ではないものを伝えようとしています。

しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。（新共同訳）

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あな

たがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを
思い起こさせてくださいます。(新改訳改訂3)

"But the Helper, the Holy Spirit, whom the Father will send in My name, He will teach you all things, and bring to your remembrance all things that I said to you. (NKJV) New King James Version, NKJV は新ジェイムズ王訳の
略

ヨハネ 14:26 の三つの訳をならべたのは「聖霊」「弁護者」についての説明のためです。日本語訳では聖霊という熟語の訳で定着していますが、ギリシア原文風に「聖なる霊」と読めばいいでしょう。英語でもふたつの単語ホーリー・スピリットとなっています。ふたつの単語で聖霊があらわされているということは、「聖霊」「悪霊」という対比、聖なるもの邪悪なるものという対立するものも背後にはあるということでしょう。

また聖霊の別名でもある弁護者ですが、ほかの日本語訳では助け主となっています。英語訳で定着している Helper、ヘルパーを参考に訳出したのではないかと私はおもいますが、新共同訳では弁護者と訳を変更しています。

弁護者はギリシア語原語で「パラクレートス」といいます。その文字通りの意味は「そばに呼ばれた者」聖霊は弟子たちとともにいて、弟子たちを助けると理解されています。「聖書と典礼 2016.5.1」より引用

また、この弁護者を日本正教会(=オーソドックス、ギリシア正教などの会派)では「慰むる者」と訳出しています。

以上のように、訳文に関していえば聖霊はおさまっていてわかりやすいのですが、パラクレートス=弁護者のほうはちんぷんかんぷんです。弁護者=助け主=慰むる者=ヘルパー(さん?)そして文字通りの意味では「そばに呼ばれた者」これじゃわかりません。結論はさっきもいいましたが「説明しなければわからないのであれば、説明されてもわからない」です。

ヨハネ 14 章 26 節の意味はわかります。聖霊がわたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。裏読みすれば、だから心配はいらない、わた

しがいなくなってもあなたはひとりぼっちじゃない、ということです。じゃ、その聖霊とはいったいなに？と聞かれても答えはさっきのとおりチンプンかんぷんなのです。（これがわかる人にはわかる、わからない人にはどう説明してもわからない、ということになるのかなあ）

あくまでたとえですが、ちょっと前の科学スキャンダルで「それでもスタッフ細胞はあります」と訴えた科学者がいました。現在のところ嘘つきとさげすまれ彼女の学説は否定されています。「聖霊はいます」とクリスチャンが言うとき嘘つき呼ばわりはされませんが、彼・彼女を白い目でみるクリスチャンも多いかもしれません。こんなことを考えていたらこんなことばを思い出しました。

「タフでなければ生きて行けない。優しくなれなければ生きている資格がない」
『プレイバック』レイモンド・チャンドラー

「If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.」以上、ウィキペディアより引用

日本訳はずいぶん意識しているみたいですが、これをもじってみました。

タフでなければ生きていけない、聖霊がいてくださらなければ生きていく気にもなれない。

イエスはわたしたちにこう約束をしてくれました。「父がわたしの名によって聖霊を遣わす」聖霊はいつもわたしたちのそばにいて助けてくださいます。この世を生きるということはほんとうにタフでなければ生きていきません、でもイエスの約束、わたしたちの助け主である聖霊が遣わされていることを信じていなければ、本当に生きていく気にもなりません。わたしたちにとって、この世の毎日はタフでなければ乗り切れません、しかし、わたしたちの生きている証として（今はよくわからなくても）聖霊の助けを信じていなければ、生きている意味なんてありません。
